

文化史における和刻本漢籍の意義

復旦大學歴史地理研究所 周 振 鶴

翻訳：紅粉芳恵・陳娟

初めに——意味の異なる二種類の漢学

明治30年（1897）2月18日、東京哲学書院から出版された雑誌『東華』の第一号には、当時、日本で著名な哲学者であった井上円了が書いた「漢学再興論」が掲載され、この文章は古城貞吉訳で『時務報』第22冊にも掲載された。古城訳では、「明治以前、漢學最盛、士人所謂學問者、皆漢學耳……及政法一變、求智識于夕陽、學問之道亦一變、貶漢學為固陋之學……然其衰既極、意將複變也。比年以來、國學勃然大興、其勢殆欲壓倒西學、而漢學亦於是乎將復興也」となっており、大意だけを取り、原文とはやや趣きが異なる。

井上の文章のこの部分は概説であり、日本における漢学の盛衰に関して正しく述べてはいるが、詳述していない。詳しく言うと、日本の漢学は江戸時代に最も栄えたが、初期の西学、即ち蘭学がすでに江戸時代後期に影響を及ぼし始めた。それと期を同じくして明治維新後は西学が盛んになったものの、漢学はまだ下火にはならず、相変わらず重きを置かれ、西学における一切の新語が漢学の知識によって翻訳されていることから、明治初期においても漢学はまだまだ重要視されていた。恐らくこの状況に刺激を受けて、福沢諭吉が明治18年に「脱亜論」を書かなければならなかったのは、中国儒学の影響から脱する必要があるためである。その後、日本固有の学問である国学と西学が共に主流となる。日清戦争の後まで漢学は一時期完全に勢力を失ってしまった。しかしながら井上が日清戦争後3年を経ずして「漢学再興論」を発表したことは、まだ漢学の日本での地位に対して深い認識を持っていたからに他ならない。

現在、我々が言うところの「漢学」は“sinology”であり、西洋人（洋の東西を問わず）による中国の歴史、言語、文化などに関する研究を指す。しかし井上の言う漢学とは、中国それ自体の学問であって、含む意味が違う。言い換えるならば、日本で明治以前、ひいては明治前期に盛んであった漢学とは、日本固有の国学に対する言い方である。江戸時期の知識人は漢学に精通することが誇りであり、彼らは今日の意味でいう他者として中国の歴史、言語、文化を

研究するのではなく、自身の学問として研究し、漢学以外は学問とはみなしていなかった。国学の概念はまさにこのような状況のもとに興った。しかもそもそも日本の蘭学者も国学者も共に漢学の素養は非常に高い。前者は漢学（漢学を道具として、積極的であれ消極的であれ）を通して西学を紹介し、後者は漢学の素養がなければ、国学を漢学に拮抗させる地位に立たせることは難しい。もちろん、日本人学者が研究する中国の学問も漢学の範疇であるが、日本では西洋と違い、近世（即ち江戸時代と明治初期）において漢学が自国の学問であったが、西洋では漢学は外国の学問であるという根本的な違いがあった。

江戸時代の漢学の隆盛は幕府の積極的な提唱によるもので、政治的意図がある。つまり儒学を江戸時代の指導的な思想とし、諸藩の幕府に対する忠誠を保証するためである。筆者は「“脱亜入欧”的虚與実」という論文で、江戸時代における漢学の隆盛について言及したが、この史実はまだ中国人学者の注意を喚起していないようである。この問題は広範にわたるため、ここでは簡単に和刻本漢籍及び漢学者を例として、漢学の近世における隆盛について述べることにする。

和刻本漢籍の基本的な概念

漢籍という概念は広く、簡単に言えば、漢字で書かれた書籍¹⁾のことである。中国はもちろん、海外にも大量に存在しているため、域外漢籍の研究は近年徐々に盛んとなっている。朝鮮燕行録とベトナム北行録の出版により、中国人はこの氷山の一角を認識するに到った。韓国では、三千冊もの文集がすでに影印出版されている。朝鮮の李朝実録及び多数の歴史、地理の著作も漢字で書かれており、漢籍と言える。和刻本漢籍と朝鮮漢籍の研究状況が比較的良好なのは、日本人学者と韓国学者の研究成果であり、中国人学者及び世界の学者はこれらの研究が十分とは言えない。

長澤規矩也先生の見解によると、いわゆる和刻本漢籍とは、日本で版木を彫って出版された漢籍で、そこには日本人の注釈、考訂等の研究成果は含めない。これらの漢籍は中国本土の漢

1) 漢籍に対する定義は数種類あり、長澤規矩也『漢籍整理法』（汲古書院、1986年第4版）の基本定義は以下の通り：「いわゆる漢籍（漢書）は国書（和書）に相対する呼称であり、基本的には中国人の著作で、常用するために縦書きを原則とした文字で書かれた書籍である。」そして武田時昌は『漢籍はおもしろい・総説』（研究出版、2008年）で、「中国では昔から多種多様な書籍を著述し、朝鮮、日本、ベトナムに広く伝播し、共通知識を基礎とする漢字文化圏が形成された。これらの書籍群を総称して漢籍と言い、現在でも大量に残っている。では、漢籍とは一体何か。漢文で書かれた全ての書籍を指す」と述べている。勿論、最も狭義の漢籍とは中国人の著述で、中国で出版された書籍を指す。

籍に対する覆刻であり²⁾、中国にはなく、日本で刊行された中国人の著述（特に清朝末期の学者の著作、翻訳）もある³⁾。前者のような忠実な覆刻は日本では古くからあり、特に13世紀末から14世紀の五山版と言われる和刻本は、宋元版本の複製本であり、我々は名画の贋作に対する賞賛を借りて、「下真跡一等」（本物に次ぐもの）と呼んでいいだろう。こういった覆刻が重要なのは、中国では散佚してしまったものを、安心して原版として扱えることである。江戸時代以来、中国典籍に対する覆刻は大量に行われ、一般読者の便宜を図るため、訓点も加えられた。これらの和刻本漢籍の漢籍原本に対する重要性は、学者らが日本に存在する唐本漢籍を収録する際に、和刻本にも言及することに表れており、この点に対してもっと深く研究されることを希望する⁴⁾。

江戸時代は漢学を学ぶために、先ず中国で出版された漢籍を大量輸入しなければならず、これは市場では唐本と呼ばれた⁵⁾。輸入書籍の値段は当然高く、これは現在中国が外国書籍を輸入するのと同じ状況である。そこで、日本ではまず唐本を真似て覆刻し和刻本⁶⁾としたが、日本語の文法、漢字の読み方は中国語と違うため、訓点を加えることが一般的であり、日本人学者の朗読と理解の助けとした。これが最初の第一歩であり、第二歩は日本人学者が漢籍を精読、研究した後、中国人学者の註疏も参考にして、自分の創造的な理解が生まれ、漢籍に注釈や解釈を加えた増註版、訓詁版といった形式が誕生した。注釈の方法としては文中に挟んだり、小文字で書いたり、龍頭といった形式が見られる。『四庫全書総目』に収録されている『七経孟子考文補遺』のように水準が非常に高いものもある。しかし四庫全書に収録されている日本人学者の著作は極めて少なく、彼らが注釈した大量の漢籍を実のところ我々はまだ気づいていない。この種類の本を准漢籍と呼ぶ学者もいるが（後述する）、これは中日文化交流を研究する上で重

2) ここで言う覆刻は中国漢籍（即ち唐本）に対する忠実な再刻本で、以前は翻刻とも言った。しかし「翻刻」は日本では翻訳して刊行することを表す場合もあり、混乱を避けるため、本論では「覆刻」は日本が中国典籍をそのまま再刻することを表す。また、「翻刻」をテキストは中国の原本に忠実であるが、版式が変更された刻本という意味で用いる人もいる。張宝三『台湾大学図書館蔵珍本東亞文献目録——日本漢籍篇・序文』（台湾大学出版センター、2008年）参照。

3) 長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録・前言』参照。

4) 高田時雄『「日本所蔵中文古籍データベース」の紹介』、『漢学研究通信』第113号、2010年2月。

5) 長澤規矩也は唐本と和本、漢籍と和書が異なる概念だと分析した：「漢籍と和書の区別は内容の違いを指し、唐本と和本の区別は刊行場所の違いを指す」『漢籍整理法』6頁、汲古書院、1986年第4版参照。

6) 長澤先生の和刻本の定義は、中国における当該書の原刻本の有無を問わない。これは三つの状況に分けられる。第一は、原典が写本の形式で伝えられたもの、第二は、明治時代に日本に滞在した中国人の編著を日本人が出版したもの、第三は、日本に滞在する清国人学者が日本で出版したもので、清刊本の著述とも言える。しかしながら、長澤自身も第二と第三の区別は容易ではないと考えていた。前掲の長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録・前言』参照。

要であり、筆者は東西学術研究所もこの分野に力を入れると良いと考える。

和刻本漢籍にはもう一種類あり、上述した準漢籍よりもさらに漢籍から離れる。上述の準漢籍は中国刻本を覆刻した上で訓点と注釈を加えたものであるが、このタイプは中国には元々当該書の刻本がなく、日本人学者が新たに刻印したものである。例えば、『唐詩集注』は元々中国にはなく、明代の李攀龍の名を借りた『唐詩選』⁷⁾に、蔣一葵が注釈をしたもの（中国国家図書館には明本があるが、年代は不詳。北京大学図書館には康熙三十一年本がある）、及び唐汝詢の『唐詩解』がある。和刻本の『唐詩集注』は中国の『唐詩選』と『唐詩解』を合わせたもので、近江藩の宇野明霞（字は鼎）・士朗（字は鑿）兄弟が編纂、顯常和尚が補足したものである。このような書籍も準漢籍に数えられるが、準漢籍の種類は多く、これも日本人漢学者の創造性の発露ではあるが、ここでは詳しく述べない。

江戸から明治初期における漢学者については、日本人学者が作った多くの名録も参考になる。なかでも1943年関儀一郎らが著した『近世漢学者伝記著作大事典』は非常に役に立つ。この大事典に掲載されている著作は、日本人学者が創造的に注釈した漢籍刊本、いわゆる準漢籍と呼ぶもので、中国漢籍の単なる覆刻版ではない。性質の異なる漢籍を区別するために、おもしろい比較例を挙げておく。江戸時代の学者久保愛の著作である『荀子増注』は、長澤先生の目録には収録されていないが、関儀一郎の『大事典』には収録されている。一方、久保愛の息子、久保謙が校訂した『毛詩正文』と『文選正文』はどちらも長澤目録に収録されているが、関儀一郎の『大事典』には収録されていない。覆刻は研究とは言えず、覆刻者も漢学者とは見なさない。しかし、漢学者が手を加えた和刻本漢籍は日本人の著作となる。近年来、各種の和刻本漢籍を区別するために、準漢籍という概念⁸⁾が打ち出されたのは、これら準漢籍の一部が日本の『国書目録』に収録され、日本人学者の著作として時には漢籍目録にも収録されるというダブルスタンダード現象を避けるためである。日本の準漢籍は、漢籍と和書の間にある広いグレーゾーンであり、この一帯には様々な和刻本書籍が我々の研究を待っている。20世紀後半以来、この認識がすでに歩みだし、現在ではより多くの人の興味と注目を引いている。

7) 『四庫全書総目』巻189『古今詩刪』云：“流俗所行，別有攀龍『唐詩選』。攀龍實無是書，乃明末坊賈割取『詩刪』中唐詩，加以評注，別立斯名。”

8) 高橋智、高山節也、山本仁『漢籍目録編纂における準漢籍の扱いについて』、推古書院、『推古』第46号、平成16年12月。この文は、和刻本漢籍と和書の間にある準漢籍という概念をはっきりと打ち出し、三者の接点をはっきりとさせた。同時に、実例で異なる準漢籍の種類を説明しているが、範囲が広すぎると考える。また、前掲の『台湾大学図書館蔵珍本東亞文献目録——日本漢籍篇・序文』も準漢籍の多くの類型を分析している。

日本人漢学者と和刻本漢籍の量的規模

近世日本の漢学は幕府に重要視され、漢学者も持て囃された。江戸時代初年の藤原惺窩を始めとして、漢学は僧侶の手から専門の漢学者の書齋へと移った。二、三百年間は、漢学者の人数が多すぎ、詳しい伝記資料が残っておらず、正確な統計が取れないため、存在する漢学書籍数から逆に曾てどれくらいの漢学者が漢学界で活躍していたかを推測する人もいる。中国の状況はこれとは少し違う。中国では本がなくとも著者名が書籍に記録されるが、日本では本はきちんと保存されているが、あまり有名でない著者は忘れられる可能性がある。昭和期以降、多くの日本人学者が漢学者と和刻本の記録を行ってきた。前者の始まりは比較的早く、多数の編著が現れたが、中でも一番有名なのが関儀一郎らの『近世漢学者伝記著作大事典』である。一方、後者は長澤規矩也の『和刻本漢籍分類目録』のみである。しかし、両者の認定基準は異なり、前者は著作から作者、即ち漢学者を推測するが、著作の版本は細かく記録しない。片や長澤は、版本は詳しく記録するが、覆刻校訂本のみで、日本の漢学者の創造的な仕事には触れない。二冊の本の役割は全く異なるのである。

関儀一郎の本に収録された漢学者は範囲が広く、専門家もいれば、そうでない人もいる。著作も経典、諸子の著作に対する解釈から、政治・道徳・歴史・芸術などに対する論説・随筆・雑著なども含まれており、人物は2,900名、書目は2万余に及び、収録期間は元和5年（1619）から昭和12年（1937）までとなっている⁹⁾。同時に、学派の系譜、漢学の年表も編纂された。この本は第二次世界大戦末期の1943年に出版され、500部しか印刷されなかったため、入手が困難であるが、一部が中国の古書店に流れ、たまたま筆者は購入¹⁰⁾し、以来最も重要な参考書の一つとなっている。附録の学派系譜は、日本における漢学者の師承関係がきちんと書かれており、中には父子相伝もあり、壮観である。日本の漢学者の伝記に関する本は、関氏のこの本が規模、内容ともに最大である。

長澤は版本のみに着目する（しかし長澤は、和刻本の価値は訓点にのみあると考え、訓点のない旧刊本及び旧活字本を目録に収録していないのが残念である）。同一本でも異なる版本は記録されているが、例えば、孝経・四書・十八史略・小学・古文真宝・文章軌範・唐宋八家文読本などは明治期の版本が極めて多く（現在でもよく見かける）、江戸末年までを記録している。

9) 収録された学者は明治初年生まれの人以外は、全て江戸時代生まれの人である。

10) 日本の古書ネットを調べると、この本は影印本だけが販売され、原本は出回っていない。長澤規矩也『漢籍整理法』参考文献目録を影印版とする。

医学と仏教書籍は含まれていない¹¹⁾。残念なことに、長澤自身、どれだけの著作があり、どれだけの学者が関わっているのか統計を取っていない。

この二種類の完璧な参考書以外に、専門的な著作も研究に資する。例えば高田真治の『論語の文献と注釈本』（非売品）がある。高田教授の考証によると、日本人の『論語』に関する著作は93種類もあり、関係する作者は77人いる。この他にも著作はあるが、見聞したものに限るため、ここでは述べない。

和刻本漢籍の重要な学術的意義

和刻本漢籍の最も重要な学術的意義は、中日の学術文化関係が不可分であると証明することである。中国文化を体現する漢籍が日本に入り、創造的な発展として和刻本漢籍という一群が形成されたことは、日本の学術文化を促進させたのみならず、同時に中国の学術にもフィードバック作用を引き起こし、中日の文化交流関係を体現したに止まらない。詳しく言うと、その意義は以下の通りである。

一、中国漢籍に対する重要な補足と訂正

1、中国に存在しない典籍を保存する

筆者の統計によると、中国の乾隆時代に編纂された四庫全書存目類の中で、現在まで約2000種の本が散佚した。四庫に収録されていない書籍の散佚数は、未だに統計がない。例を挙げると、『江湖風月集』、『點簡齋詩集』、『橘洲文集』、『雪岑和尚續集』、『藏叟摘稿』、『増注唐賢絶句詩法』、『精選唐宋千家詩聊珠詩格』、『遊仙窟鈔』、『白雲集』、『標題註疏小學集成』など、底本は全て宋元版で、中国ではほとんど存在しない。明末の『破邪集』に至っては、中国人学者はみな安政年間の日本の刻本を引用する。中国国家図書館と上海図書館に所蔵されているのもこの版本である。中国本土の万曆刻本はほとんど見るできない。

2、中国に存在しない版本を保存する

宋代楊萬里の『千慮策』は、中国国内にはすでに存在しないため、『四庫全書存目叢刊』には収録されていない。しかし、安政年間の和刻本は今でも日本ではさほど珍しくなく、筆者も購入した。この本の内容はすでに楊氏の『誠齋集』に含まれているが、宋代から単刻本が出てい

11) これらの本は多数あり、例えば『全浙兵制考附是日本風土記卷一「倭好」』云：「重佛經、道經。若古醫書，每見必買，重醫故也。」

るそうで、宋代刻本からのものだという和刻本もある。これは当該書の版本に関して一つの手がかりを提供しており、真偽の程は当然ながら考訂が必要である。また、明の万暦刻本の『全浙兵制考』も中国には存在せず、『四庫全書存目叢刊』に収録されているのは天津図書館の抄本だけであるが、日本風土記五巻が欠けている。しかし、日本では写本を除いて、少なくとも全刊本が二種あり、それぞれ国立公文書館と前田育徳会が所蔵している¹²⁾。

3、版本校勘に対する重要な価値

中国に伝わる古籍は歴代の覆刻の過程で形が変わっている嫌いがあり、特に明代後期に刊行されたものは、書籍商が手っ取り早く儲けたいため、名をかたって古書を偽造したり、勝手に文字を変えたりしている。また明代の学者はわざと原文を変えており、清代の学者は「明人刻書而書亡」と嘆いている。しかし和刻本は一般に非常に中国の典籍に忠実であり、一字たりとも妄りに変えず、写本の虫食いの跡さえも忠実に模写しているため、和刻本で中国古籍を校訂することは重要な意義がある。上述した『荀子増注』は『荀子』の校勘に重要な価値を持つ。

二、日本人学者の中国典籍及び中国文化に対する研究水準を表す

江戸時代の学者は、中国文化の研究に非常に時間を費やし、研究水準の高いものが多く、これらの研究が和刻本という形式で著された。藤川正数の『荀子注釈史上における邦儒の活動』では章ごとに、荻生徂徠（1666-1728）の読荀子、片山兼山（1730-1782）の荀子考、塚田大峰（1745-1832）の荀子断、猪飼敬所（1761-1845）の荀子考、桃井白鹿（1722-1801）の荀子遺乗、久保築水（1759-1835）の荀子増注を論じた。また久保築水を論じた章では荻原大麓の荀子説、古屋昔陽（1734-1806）と岡龍州の荀子説に言及し、これら日本人学者の研究と清国人及び近代中国人学者の研究とを詳細に比較した大著となっている¹³⁾。ここで言及された久保築水の『荀子増注』は自身の発見以外に、“享保以来の諸家の説”を用い、この和刻本は荀子を研究する日本人学者の集大成と言える。当該書の底本は世徳堂本であるが、世徳堂本を訂正している箇所も多い。「荀子序」を「荀子注序」に正しているが、この「注」の字は宋本と韓本補に拠る。当該書の校勘は極めて綿密で、『勸学篇』の「玉在山而草木潤」は、「草木」を「木草」とはしていない。しかしながら底本の誤植を踏襲している場合もあり、『解蔽篇』の「数为蔽」の「数」は、実は「故」の誤りである。研究によると、底本は世徳堂の原刻本ではなく、延享2

12) 日本所蔵中文古籍データベースを参照。

13) この前に藤川正数教授は『論桃井白鹿の揚子法言注』を書いており、日本人学者の中国典籍に対する研究の由来がここにあることが分かる。

年、平安書林葛西氏の世徳堂覆刻本とのことである。

藤川先生の本は、日本人学者の荀子研究の相互影響を吟味しながら、清代の劉台拱、郝懿行、王念孫、俞樾の荀子に関する説を比較し、日本人学者と清代儒学者間の影響を究明すると同時に、日本人学者の生み出した新見解が多いことを発見し、日本人学者の荀子の研究における成就としている。また、同時に以下のような結論を出している。双方で同じ見解が230所もあり、清代儒学者が日本人学者の成果を採用したのではないかと疑ったが、最終結論はただの偶然の一致であり、剽窃ではないとした。しかし、日本人学者は中国人学者に全く影響を及ぼさなかったわけではない。1930年代以降、梁啓雄の『荀子東釋』は、徂徠の読荀子、築水の増注、敬所の補遺、況斎の荀子考などを引用している。重要なのは、両国の学者の見解には偶然の一致はあるが、日本人学者の見解のほうが中国より数十年早いことは指摘するに値する。しかしながら中国の学術界において、この点を指摘する人はまだいないようである。

三、日本の学術史、思想史、文化史研究に対する重要な意義

この仕事に対して、日本人学者はすでに注意しており、多くの成果があるが、中国人学者は基本的にほとんど言及していないため、筆者は妄言はできないので、日本人学者の研究に基づいて少し述べておく。

日本の戦国時代の武将の中にも文化教養面で傑出した才能を発揮した人物がいる。例えば甲斐の武田信玄（1521-1573）、越後の上杉謙信（1530-1578）、その家臣の直江兼続（1560-1619）、奥州の伊達政宗（1567-1636）らで、彼らは漢籍に対する造詣も深く、漢詩も伝わっている¹⁴⁾。江戸時代後期の安積良齋は吉田松陰、高杉晋作、重野安繹、中村正直、岩崎弥太郎ら著名な日本人学者や企業家の師匠であり、漢籍の理解と研究が極めて深く、その上創造性もあった¹⁵⁾。

さらに日本人学者は、明治維新後でさえも漢籍の役割は終わっていないと考えていた¹⁶⁾。当然ながら以上述べた漢籍は狭義の中国からの漢籍で、本論文の範囲ではないだろうが、安積良齋の時代も恐らく和刻本漢籍を利用していただであろう。この方面の研究をさらに深める必要がある。

14) 静永健『戦国武将と漢籍』、アジア遊学93号〈特集：漢籍と日本人〉、2006年11月。

15) 佐藤浩一『安積良齋——時代の分水嶺における儒者と漢籍』、アジア遊学93号。

16) 静永健『まだつづく、漢籍と日本人とのつながり』、アジア遊学116号〈特集：漢籍と日本人Ⅱ〉、2008年11月。

四、日中文化交流の実態を明らかにし、東アジア世界の文化関係を説明する

1、日本学術の中国学術に対する逆影響

荻生徂徠の『論語征』の観点は、劉寶楠の『論語正義』の中に見える。清国人阮元の十三經の校勘という仕事は、恐らく日本人学者の『七經孟子考文及補遺』から間接的影響を受けているだろう¹⁷⁾。山井鼎の考文は享保12年（1722、雍正5年）に完成し、翌年逝去した。盧文弨は読了後、「歎彼海外小邦猶有讀書者」¹⁸⁾と言った。その盧文弨は多くの中国の經典を校訂し、校訂の成果は阮元に受け継がれ、『十三經注疏』という重要な学術成果となった。

2、日本は明治初期に至っても漢学を重視した

中国・日本・朝鮮の和やかな時期は17世紀中期以前の事で、つまり明清を境として、清代以後、朝鮮は清朝を見下げ、東アジアは瓦解したと考える者もいる。これはその一を知って、その二を知らないと言える。実は、満族の漢民族化、清代統治者の中国文化に対する同意に従って、東アジアは一連の騒ぎの後、旧態に復した。朝鮮には北学があり、日本は明治初期までひたすら中国の文化に追従し、中国の王朝交代によっても明治初期まで漢学を捨てなかった。固より日本は国学を提唱したが、そのために漢学を捨てず、明治中期になって明らかな痛手を蒙ったのである。19世紀末に井上円了が言ったように、彼は漢学が復興すると考えていた。

五、西洋世界に対する影響

漢学研究において、一部の西洋人学者は直接漢文典籍を読まず、和刻本を橋渡しとした。ここでは、その一例を挙げておく。1898年版『英訳評注道德經』(Lao-Tze's Tao-The-King) by Paul Carus (1852-1919)、ポール・カールス著作選、The Open Court Publishing Company (Chicago) (アメリカ・シカゴ公廷発刊所発行) 中の『老子とその哲学についての紹介』という一節で紹介されている道德經の当代の版本として、最初に清末の西洋社会で選ばれた『道德經』の教材の底本五種類を紹介しているが、フランス語版を除いて全て和刻本であり、東京須原屋が出版した字惠校訂の『老子道德經王弼注』、松山堂が出版した木山校訂版『老子道德經蘇轍注』、二書房が刊行した西村越溪の『老子講義』である。和刻本漢籍が西洋にも影響を与えていることが見て取れる。

17) 高橋智『慶長刊論語集的研究』(上)、『斯道文庫論集』第30号、平成8年1月。

18) 『周易註疏輯正題辭・抱經堂文集卷七』。

結語

以上は筆者が短時間で考えた結果であり、この研究テーマについて、中国人学者はまだ馴染みがない。長澤規矩也先生の『和刻本漢籍分類目録』は既に数版を重ねているが、中国人学者が利用することは少ないようである。日本のその他の漢学者及び参考書的な著作に至っては、多くの中国人学者は目を通してもいない。そして多くの和刻本漢籍、各種の準漢籍を含む研究は更に遠く及ばない。極端に言えば、漢籍、和刻本漢籍、準漢籍という基本的な概念及び相互の関係さえもはっきりと整理されていない。しかしながらこの20数年来、和刻本漢籍、朝鮮漢籍、ベトナム漢籍を含む域外漢籍の研究について中国人学者も重視し、1986年から1995年まで連続10回学術討論会を実施した。日本では、和刻本漢籍の研究は明らかに中国人学者の前を行き、関西大学では故大庭修教授がその先駆けである。大庭教授の研究の重点は漢籍の日本への流入であるが、その著述は和刻本漢籍の研究にとって啓発的な意義があった。筆者は今後、中日の学者がこの方面で協力研究する可能性と、関西大学東西学術研究所がこの研究において良好な環境を作り出すことを希望している。